



山村礼子

砂と風とレイコ



砂と風とレイコ

山村礼子



講談社

砂と風とレイコ

1991年4月15日 第1刷発行

定価1100円
(本体1068円)

著 者 山村礼子

発 行 者 野間佐和子

発 行 所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-01

電話 販売部 03-3943-9303

製作部 03-5395-3615



企画編集 株式会社講談社出版研究所

代表 山本康雄

東京都文京区小日向4-6-19 共立会館 郵便番号112

電話 03-3943-2613

印 刷 所 株式会社東京印書館

製 本 所 黒柳製本株式会社

© Reiko Yamamura 1991

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは講談社出版研究所宛にお願いいたします。〈担当＝松澤達雄〉

ISBN 4-06-204626-1 (研)

目次

はじめに——二度目のパリ・ダカールから帰ってきて……………	5
-------------------------------	---

第一章 私とバイクの今日この頃……………	11
----------------------	----

1 ぐるんぐるん転倒 in ファラオ……………	12
-------------------------	----

2 彼のパリダカ奮戦記……………	25
------------------	----

3 私がラリーに魅かれる理由……………	39
---------------------	----

4 半年ぶりのヘルメット……………	54
-------------------	----

第二章 札子のラリーメモリー……………	67
---------------------	----

1 レースの最後は池の中——第四回香港・北京ラリー……………	68
--------------------------------	----

2 初めての完走——第六回ファラオ・ラリー……………	79
----------------------------	----

3	言葉を失ったリタイア——第二回パリ・チュニス・ダカール・ラリー……	84
4	不思議なアミューズメント・ラリー——第七回グレート・アメリカン・レース……	95

第三章	旅、オシゴト、そしてバイク……	105
-----	-----------------	-----

1	いつも愉快的旅ガラス……	106
2	仕事って、生きるって、へオシゴト論……	117
3	オンナたちとバイク……	129
4	さりげなくバイクに乗る……	149

第四章	地球を旅して……	157
-----	----------	-----

1	ジャンボ！ アフリカ……	158
2	ハウデイ！ アメリカ……	176

3	サヴァ！ フランス	190
4	ニーハオ！ 中国	201
5	もっと出合いを！	210
	あとがき	219

装丁 岸 顕樹郎

カバー写真……ミシェル・アインドル、山村雅康
見返し・扉写真……安友康博

はじめに

——二度目のパリ・ダカールから帰ってきて——

ふうっ。二度目のパリ・ダカールからやっとな帰ってきました。ここ一年くらい、海外に行くとなぜだか日本食が恋しくなるのですが、今も、とにかく「スシ！ カレーライス！！ ラーメン!!!」と叫びつついやしいお腹になっております。二〇代はよその国コンプレックスらしきものがあつた私も、どうやら日本人を自覚……いや、自覚というより、この太平洋のちっぽけな島国の土壌に生まれ育つたということをヒシヒシと感じております。故郷とはなんだろう。地球とは。宇宙とは。人間とは。永遠とは。夢とは。愛とは……。

答えらしきものが見つかりそうになると、メビウスの輪のように、またくると反対側に出してしまうのが常。でも、考えずにはいられない。たとえ何処にしようと、何をしよう、私にとって生きるといふことは、

それらのカケラを感じることをみたいです。

そう、《第二三回パリ・トリポリ・ダカール》のハナシでした。650ccバイクでの出場だったのですが、楽しかったなあ。一八日間のラリーで八日というと、かなり走ったように思えるけれど、アフリカのSSと呼ばれる競技が始まってからは、三日目のリタイア。「なんでそんなにニコニコ帰ってきたの？」失意の底に落ちて落胆しきっていると想像していた友人たちは、口をそろえて驚いた。しかし一番驚いているのは、当の本人だ。

最後かもしれないと思って臨んだラリー。いつものようにスツカラピンになっての挑戦。それが一瞬のうちにパーになってしまったのに、なぜ楽しくてしかたないのか、ホントに不思議。でも「なぜ」だかのうちの、ほんの少しはわかつている。

「未完走イコール競技者失格」だし、「うなされるほどクヤシイ」ということはあるけれど、それにもまして手に入れたものが大きかったから。

今の私がやれるだけやった充実感！

ライダーが二人、ベルギー人のメカニック、フランス人のドクターとい

う三カ国のチームメイトと共に夢を追いかけた四ヵ月！

今回走った四千二百キロ。その全てが楽しかった。苦しいけれど楽しい。楽しいから笑顔が絶えない。口喧嘩もしたけれど、砂漠の中じゃサバサバしたもの。いつも一緒に走った夫とベルギー人のゴッフォアおじさんには、言葉も見つからないほど感謝している。とくに私の蹴散らした石の直撃をまともに喰いながらもフォローしてくれた夫には「すみません」と「ありがとう」を二百個ぐらいっけなくてはならない。

ニンマリしてしまう理由は、まだあった。

アフリカが大好きな私を再確認できたことです。もう体力的にバイクで
のラリーは無理かなと思っていたのに、「いや、まだまだへっちゃら。子供
産んでからでも大丈夫かもネ」……と無茶とも思える発見をしてしまった
こと。確かに前のようにはいかないかもしれないけれど、駄目だと思つた
ときが駄目なときなんだよね。結婚したいと思つたときが適齢期というの
と同じこと。そしてもうひとつ、大切なことを発見してきたんだ。あまり
にも当たり前だけれど、……私はやっぱりバイクが好きなんだなあという

こと。これはもう理屈じゃない。この不安定で、勇ましくて、従順で、美しくて、生意気で、手がかかって、カッコ良くて、夢のある乗物、どうやら私の身体のパーツとして、いつの間にかシツカリ組み込まれていたらしい。

もしバイクと出会っていなかったら、レイコさんは何をしていたと思いますか？ という質問をよくされることがある。これまでは、何になったのかなあという考えをめぐらしても、あまりピンとくる答えが浮かんでこなかった。でも、今ならわかる。

もしもバイクがなかったならば——私は生まれて来なかったに違いない。

砂と風とレイコ

第二章

私とバイクの今日この頃

一九八九一年一〇月二〇日、お日様が自分の真上にある。私は横たわりながら、ゆっくりと流れる時間の中でリタイアを意識した。エジプトのババリアからファラオに向かうコース上の砂丘のまん真中だった。

《第八回ファラオ・ラリー》、一日間でエジプトをほぼ一周するというこのラリーに出場するのは、これで二回目。アフリカの水を飲んだものは、再びアフリカに戻ってくるの言葉どおり、私はやってきてしまった。そして、その三日目、先に進みたい、ゴールに着きたいという気持ちは、〇・〇〇一秒の判断ミスでシャボン玉のように消えたのだった。

今回のラリーは今までのどのラリーとも違う意味を持っていた。海外ラリー五戦目（二輪三回、四輪二回）ということもあり、目標は高かった。二輪一五一台中、総合二〇位以内！ 250 ccクラス優勝！ 女性クラス優勝！ 言うのはカンタン、やるのは大変。でも大きなトラブルさえなければ不可能なポジションではなかったと思う。

けれど、一転びが致命傷で地獄へ落ちてしまった。転倒といってもいろいろな場合がある。マシンのみがダメージを受けることもあれば、マシンはなんともないのに人間のみがダメージを受ける場合と、さまざま。そして今回は、その両方だった。砂漠とはいえない地面のせいか、とりわけ人間のダメージがヒドイ。バイク人生の中で、これまで転倒がなかったわけではないけれど、こんな痛さは初めてだ。

転倒したときは、普通、滞空時間がスローモーションのように長く感じられるものなのに、あつと気がついたら地面に打ちつけられていた。ポンツポンツではなく、ズサササーッ。波の高い海でボディ・サーフィンをしていると、たまにもみくちゃにされながら浜に打ち上げられるときがあるけれど、そのときと同じくらい自分ではどうにもできないズサササーッだった。

そして心底「ヤバイ！」と初めて思った。動きが収まり、音がなくなったものの、何もできない。まともな息ができない。目の前が霞んで焦点が合わない。身体は、早く大きくヒクヒク動いていて、異常事態を叫んでいるのに、動けない。一瞬、死ぬかと思った。

たまたま近くにいたので走ってきてくれた外人ジャーナリストたちや、私が追ってこないことに気がついて、砂丘をよじ登り戻ってきてくれたサポートライダーの夫に生きてい

ることを知らせたいけれど、身体のどこも動かすことができない。

日本のあちこちで見たバイクの事故現場と同じ光景が、そこにはあった。違っていたのは、いつも「がんばれ！」と負傷者を励ましていた私が、無口な横たわり人になっていたこと。心配させないようにと、唯一反応してくれる右手でピースサインを出してみたけれど、きつとそれは、私の一六年間のバイク生活の中で一番頼りない、けれど必死な合図だったと思う。

にしても……暑い。こんな状況なのに、耐え難い太陽の光線は、弱った身体を痛めつけるように容赦なく降りそそぐ。プレスカーが横に止まってわずかな影をつくってくれたとたん、呼吸がすうっと楽になった。無線で呼ばれたのか、三〇分ほどで救急車もやってきた。ヘリコプターで病院行きだと思っていたら、診断の結果は全身打撲。で、「安静にして最後のカミオンバレー（リタイアした人と競技車を次のキャンプ地まで運んでくれる主催者側のお掃除トラック）に乗りなさい」との指示。このくらいの負傷じゃどおってことないよって感じすら伝わってくる。血がバアバア流れて骨がボキボキ折れたら乗せてくれるのかなと思っていたら、同じところで転倒リタイアしたイタリア人のイッポーくんは、えぐり取られた背中から血がしたたり落ちている、なのにヘリコプターではなく、私と同じ